

〔学界展望〕

情緒（感情）分析と家族研究

山田昌弘

1 「情緒 (EMOTION)」研究と社会科学

「情緒 (EMOTION)」研究が社会諸科学の関心を集めつつある。

例えば、心理学。一九六〇年代頃から、認知の一要素としての情緒が実験的にも研究されるようになってきた。例えば、社会学。一九七〇年代頃から、「情緒社会学」を自称する研究が現れ、実証分析の成果もあがりつつある。文化人類学でも、情緒経験の文化比較など、情緒を直接扱った研究が最近見られるようになった。歴史学でも、一九六〇年に出版されたアリエスの「子供の誕生」以来、情緒に関するデータが蓄積されつつある⁽¹⁾。

これらに、共通する特徴は、「情緒現象」の文化規定性を主張する所にある。情緒は、決して本能によって一〇〇%規定されているものではなく、文化的な要素によっても規定されているという立場が、社会科学における情緒研究を開花させた。

情緒研究が盛んになっている背景には、まず第一に、情緒現象が、理論的にも資料的にも、成熟した社会諸科学の最後のフロンティアとして残されていた事、第二には、離婚の増大や性の多様

化、友愛関係の重視など、人々が「情緒」、特に愛情に寄せる関心が高まっていることがあげられる。

2 家族研究と情緒分析

我々の社会では、家族と情緒の関係は切っても切れないものがある。しかし、従来、家族情緒は、主観的判断により、規範的に論じられることが多かった。例えば、「母性愛は本能」「これが本当の愛情だ」「家族愛が必要」「伴侶性」などの表現に見られるように、他の部分が客観的に論じられていても、家族情緒の部分になると、主観的価値が当り前のものとして入り込んでくるケースが多かった。

学問的領域では、発達心理学、教育心理学、精神分析学の分野で、主に「子どもの情緒的発達」の視点から、家族情緒が論じられてきた。しかし、やはり、「模範的な情緒的発達のパターン」(近代ブルジョワ家族をモデルとした)をアブリオリに前提する規範的なアプローチに傾きがちであった。

我々の社会の「内部」から見れば、あたりまえ、当然で、すばらしいと感じられる家族情緒のパターン(母性愛、夫婦愛、子ども情緒的発達など)を客観的に、価値自由的に論じることが、非常に難しい作業だ。それゆえ、家族情緒をカッコに入れて分析する議論は、我々の社会を外から眺めることができる文化人類学、社会史、ラディカルな精神分析学、フェミニズムなどの諸潮流から出てきた。マリノフスキーは、トロブリアンド島調査か

ら、西洋近代以外の家族情緒パターンが実在することを実証し、ラディカル精神分析学者達は、フロイトが想定した情緒パターンが近代ブルジョワ階級に特有のものであることを強調し、アリエス、シューター、フランドランなどの社会史家達は、中世ヨーロッパ社会での家族情緒パターンが我々の社会のとはかなり異なっていたことを示唆し、フェミニズムの理論家は、近代社会の母性イデオロギーが女性の抑圧に荷担していることを非難する。

家族の情緒分析学という分野があるわけではないが、家族情緒に関する研究は、学際的な様相を示している。例えば、精神分析学の論文の傍証としてアリエスの知見が使われたり、発達心理学の論文の中でとして文化人類学の情緒分析のデータが利用されたりする。⁽²⁾

これらの諸研究を概観すると、いくつかの共通した関心がみられる。研究成果によって明らかにされつつある点を、二つにまとめてみた。

① 家族情緒パターンの多様性

まず、明かになってきたものは、「母性愛」「恋愛」「家族愛」など、我々の社会で本能的と見なされがちな家族の情緒パターンは決して普遍的でないことが調査データや資料でもって示されたことだ。

「母性愛」を例にとってみよう。文化人類学の知見によると、われわれの考えるような母性愛がまったく観察されない民族がいくつか存在する。また、子どもに対する愛他的な態度がオバなど親

族に拡大されて存在している民族もある。アリエスやバダンテールが明らかにしたように、アンシャン・レジーム期のヨーロッパ社会では、子どもに対する情緒的態度は、われわれの社会とかなり異なっていることがわかってきている。

近代以前に「母性愛」があったか、なかったかという議論をする必要はない。「非」近代社会との比較により、近代家族の「母性愛」の特殊性が明らかになってきた事が重要なのだ。例えば、「母性愛は自分の子どもにしか働かない」とか「愛他行動は母性に根拠づけられている」とか「母性愛は科学に正当性を求め続けている」など、近代家族での情緒パターンにのみ出現した特徴がいくつかあげられる。夫婦間の情緒に関しても「愛情経験により正当化される夫婦」とか、家族全体に関しては「排他的情緒共同体としての家族」といった特徴を発見することができる。

② 近代家族の情緒パターンの形成

次に、近代家族特有の情緒パターンがどういう過程で形成されてきたかについての知見が蓄積されつつある。これが、家族史の最大のテーマの一つであり、今後もあり続けるのであろう。

しかし、比較的類似した過程を辿ったと思われるヨーロッパ社会でも、地域や、階層により、近代家族の情緒パターンの形成過程が異なっている。エドワード・シューターは、子どもへの愛着はブルジョワ階層に出現し、徐々に下層に広がり、恋愛を核とした夫婦の愛情は、下層階級に出現し、徐々に上層に広がったと言

う仮説を立てるが、反論も多い。他の思想的、社会的、経済的、政治的条件とどのように連関しているか、そして近代家族情緒パターン形成過程の一定「法則性」を実証できるかがポイントとなる。

日本も含めた非西欧社会も、近代家族の情緒パターンの影響から免れてはいない。けれども、非西欧社会の近代化過程における家族史のデータの蓄積は十分ではないのが現状である。

3 今後の家族情緒研究の課題。

前節でも述べたように、「家族情緒」に関する法則定立が可能かという所が、今後の家族情緒研究の課題となっていくだろう。先にみたシヨーターの仮説、アリエスの「情緒量一定の法則（中世ヨーロッパの薄く広い情緒関係から、近代の狭く濃密な情緒関係へ）」、フランドランの「近代社会における愛と性と夫婦の一致」、そして、「恋愛結婚の誕生」「母性愛の成立」など有力な仮説が提起されている。

家族情緒の法則性の実証には、陳腐な言い方だが、ミクロとマクロのアプローチの結合が必要だろう。1で述べた心理学、社会学などで開拓された対面的な情緒分析の方法、文化人類学で考案された情緒の文化比較の方法などを用い、家族史のデータを吟味する事が有効だと思われる。恋愛とか母性愛、家族愛などは、われわれの社会の言葉、表現であり、これを学術用語としてア prioriに用いると誤解を招く。近代以前に「母性愛」があった、な

かったという論争の不毛性は、主にここから来ている。各情緒の意味を吟味し、構成要素を明らかにすることによって、家族情緒パターンに関する法則性を明らかにすることができる⁽⁶⁾と考える。

- (1) 心理学の状況は、浜治世(編)『現代基礎心理学』8、動機・情緒・人格(1981、東大出版会)に詳しい。社会学では、岡原正幸「感情経験の社会学的理解」(1987、『社会学評論』38-3)、山田昌弘「情緒社会学序説」(1986、『東京芸芸大学紀要3部門』38)を参照されたい。文化人類学では、Wierzbicka "Human Emotions: Universal or Culture Specific?" (1986, American Anthropologist vol. 88) が情緒を直接扱った研究として挙げられる。社会学分野においては、アリエス以降、単に形態的問題にとどまるだけでなく、手紙や絵画など様々な資料から「情緒」の問題に積極的に踏み込む研究が相次いでいる。

- (2) Poster, Mark Critical Theory of the Family, (1978, Continuum) および、シャプナー『母性のはたらく』(1977-1979, サイエンス社) 参照。

- (3) 実験的な試みとして、山田昌弘「近代家族における情緒の二つの意味」(1987、『現代社会学』24) 参照。
(東京芸芸大学・社会学)